

内科医師の堂垂伸

治さん(70)は千葉県
松戸市で診療所を開
く。孤独死を防ぐ地

域医療や在宅ケアの改善に腐
心してきた。安否確認「あん
しん電話」のシステム開発も
手がけた。

志を同じくする全国の診療
所のネットワークが12日午後
1時半、東京大学の安田講堂
で発表と意見交換の大会を開
く。実行委員長の堂垂さんは
この講堂で開きたかった。

思い入れがある。
1968年、当時の医学部



火論

ka-ron 玉木 研二

インターン制度に端を発した
東大紛争は、教育の意義や社
会問題と向き合わない大学、
学者のあり方を問い、全学に
広がる。学部を超えた全学共
闘会議(全共闘)方式は各地
の紛争で用いられ、学生が占
拠した講堂は象徴と映った。
だが50年前の69年1月18日、
機動隊が導入され、火
炎瓶、投石、放水、催涙弾が
冬空に交錯し、多数の逮捕者
を出して講堂は陥落した。
堂垂さんは66年に入学、工
学部に進んでいた。重工業系
の大企業に進み、宇宙開発に

安田講堂再びの冬

携わる将来を思い描く「単純
な理系少年」だった。
そして思いがけぬ紛争。全
共闘に参加、人々とそれまで
にない議論をし、本を読む。
びっしり手書き文字で埋まっ
た立て看板で情報を得た。
安田講堂陥落後、紛争は徐
々に収束に向かった。堂垂さ
んは未組織労働者の組織化を
考え、大手自動車工場に入る
が、観念通りにはいかないこ
とを知る。肉体労働について
いけず、1年半で辞めた。
30歳になろうとしていた。
大学は卒業したが夢は冷めて

いる。とりあえず受験勉強を
し千葉大医学部に入った。
そこで接した生身の患者、
地域医療の現実には驚かされ
る。医療はどうかあるべきか。
人の尊厳とは。後から思うこ
とだが、大学紛争時に多様な
討論をし、学ぼうとしたこと
が、ここに生きた。
紛争後、参加した各地の学
生はその先の道を選んだ。
堂垂さんの言葉から引用す
ると、多くは既存社会に包摂
されたが、一部は排除された
り、同化を忌避したりした。
定められた人生を歩んだ人、

人生を変えた人、魂を引き継
ぐ人、沈黙の日々を過ごした
人……。団塊の世代に重なる
これらの人々もほどなく「後
期高齢者」になる。
安田講堂で開かれる大会の
タイトルは「団塊・君たち・
未来」。団塊の世代が駆け抜
けて提起し取り組んだことを
若い世代が受け止めて交流
し、未来につなぐ発信の場に、
という希望を込めたという。
問い合わせは電話047・
394・0600。
(客員編集委員)